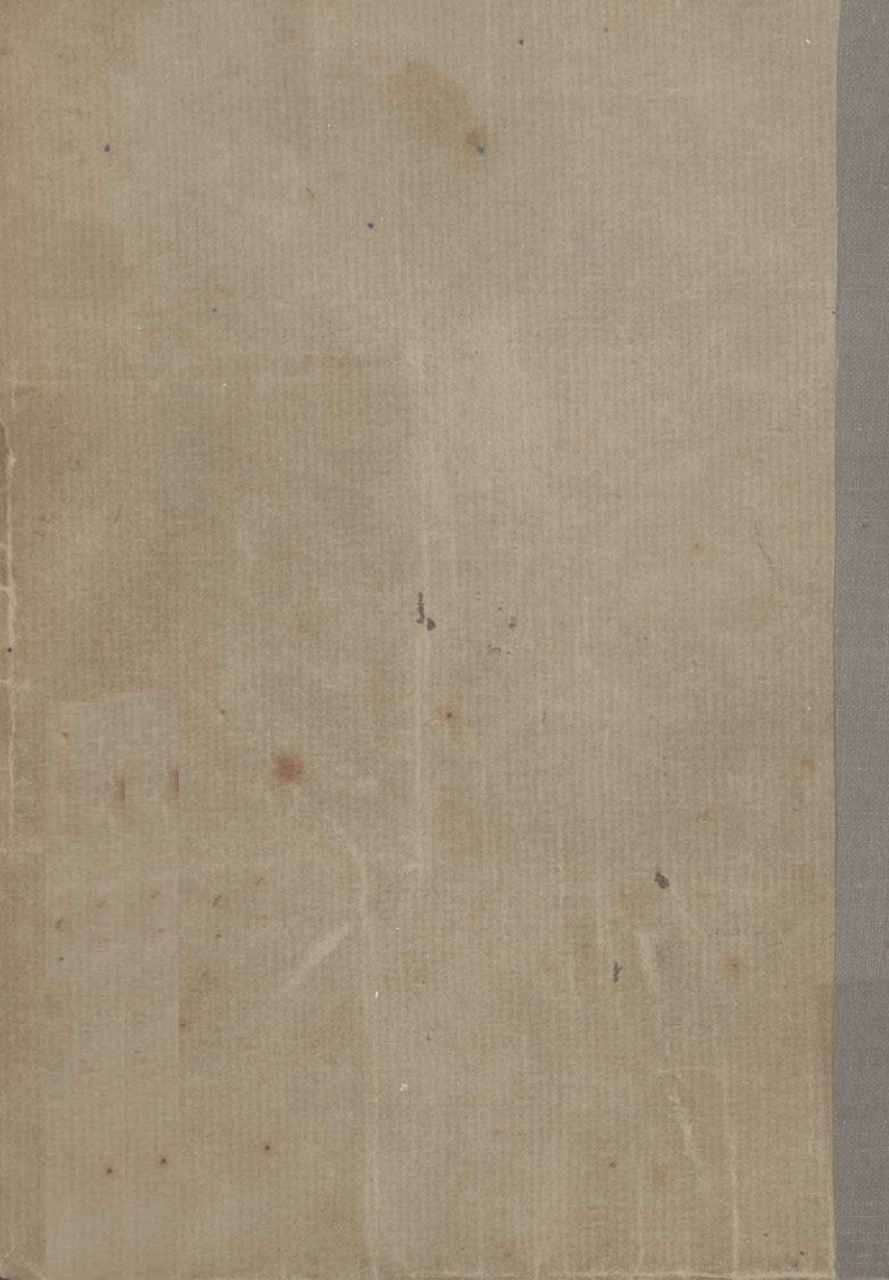




幸田文

こんなこ

創元社

昭和二十五年八月二十日印刷
昭和二十五年八月三十日發行

定價一八〇圓

地方賣價一九〇圓

著者

幸田 文あきだ ぶん

發行者

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
矢部 良 策

印刷者

東京都新宿區市谷加賀町一ノ一二
小坂 孟

發行所

株式會社 創元社

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
大阪市北區樋上町四五

電話茅場町(66)二〇六四
四〇八三

振替番號東京一五六五

目次

あとみよそわか	1
このよがくもん	99
ずぼんぼ	109
著物	137
正月記	151
啐啄	173
おもひでニツ	187

あとみよそわか

掃いたり拭いたりのかたを私は父から習つた。掃除ばかりではない、女親から教へられる筈であらうことは、大概みんな父から習つてゐる。バーマネントのじやんじやら髪にクリップをかけて整頓することは遂に教へてくれなかつたが、おしろいのつけかたも豆腐の切りかたも障子の張りかたも借金の挨拶も戀の出入も、みんな父が世話をやいてくれた。

人は父のことをすばらしい物識りだと云ふし、また風變りな變人^{へん}だといふが、父に云はせれば、おれが物識りなのではなくてさういふ人があまりに物識らずなのだと云ひ、わたしが變なのではなくて竝

外れの人が多い世の中なんだ、といふことである。はゝあとも思ひ、はてなともおもつてゐた。いづれにせよ、家事一般を父から習つたといふことは、さういふ父の物識りの物教へたがりからでもなく、變人かたぎの歪んだ特産物でもなかつたのである。露伴家の家庭事情が自然さういふなりゆきにあつたからであり、父はそのなりゆきにしたがつて母親の役どころを兼ね行つてくれたのであつた。私は八歳の時に生母を失つて以後、繼母に育ての恩を蒙つてゐる。繼母は生母にくらべて學事に優り、家事に劣つてゐたらしい。

この人は教育者の位置にあつた人であるが、氣の毒にも實際のまゝ子教育には衝きあたるが多かつた。失望、落膽、怒り、恨み、そして飽き、投げ出すといふ順序である。教へてやらうとするから私もしやな思ひをする、子も文句を云ふ、世間ぢやまゝ子いぢめだと云ふ、

ほつとくのが一番面倒が無くていいといふ宣言は、父も私も幾度も聴^きいてゐる。父は兄弟の多い貧困の中に育つて、朝晩の掃除はいふまでもないこと、米とぎ洗濯火焚き、何でもやらされ、いかにして能率を擧げるかを工夫したと云つてゐる。格物致知はその生涯を通じて云ひ通したところである、身を以てやつた嚴しさと思ひやりをもつてゐる。おまけに父の母である。八人の子のうち二人を死なせ、あとの六人をことごとく人に知られる者に育てあげた人である。ちやんとイズムがあつて、縫針庖丁掃除經濟お茶の子である、音楽もしつかりしてゐる。かういふおばあさんが遠くからじつと見てゐて、孫娘が放縱に野育ちになつて行くのを許す筈が無い。そして問題の本人たる私は快活である、強情つ張りは極小さいときからの定評、感情は波立ち易くからだは精力的と來てゐる。かういふ構成で

はどうしても父がその役にまはらなくては収まりがつかないのである、その心情は察するに餘りあるものである。

はつきりと本格的に掃除の稽古についたのは十四歳、女學校一年の夏休みである。教育は學校の時間割のやうに組織だつてしてゐたといふのではない。氣の向いた時に教へてくれるのだが、大體十八位までがなか／＼やかましく云はれた。處は向嶋蝸牛庵の客間兼父の居間の八疊が教室である。別棟に書齋が建つまでは書きものをする處にもなつてゐ、子供は勿論、家人も隨意な出入は許されてゐなかつた、いはゞいかめしい空氣をもつた部屋であつた。つまり家中で一番大事な、いゝ部屋なのである。玄關でなく茶の間でなく寢室でない、この部屋を稽古場にあてられたことは、稽古のいかなるものであるかを明瞭にしてゐる。十四といへば本當の利かん氣

の萌え初める年頃である、これはやられるなと思ひ、要心し期待し緊張した。道具を持つて來なさいと云はれて、三本ある箒の一番いのにはたきを添へて持つて出る。見て、いやな顔をして、——これぢやあ掃除はできない、ましかたが無いから直すことからやれ、といふわけで日向水をこしらへる。夏の日にそれがぬるむまでを、はたきの改造をやらされ、材料も道具もすべて父の部屋の物を使つた。おとうさんのおもちや箱と稱する桐の三ッひきだしの箱があつて、父専用の小道具類がつまつてゐ、何かする時はきつとこれを持ち出すのである。鋏を出して和紙の原稿反故を剪る、折る。折りかたは前におばあさんから教へてもらつたことがあるから、十分試験に堪へた。團子の串に鑢やすりをかけて竹釘にする、釣綸つりいのきれはしらしい澁引の絲屑で締めて出來上り。さつきのはたきとは房の長さも輕さも

違つてゐる。——どうしてだか使つて見ればすぐ會得する、と云はれた。箒は洗つて歪みを直した。第一日は實際の掃除はしなかつた代りに、弘法筆を擇ばずなんていふことは愚説であつて、名工はその器をよくすといふのが確かなところだといふことを聞かされた。その日、その部屋は誰がどう掃除したか、まるで覺えてゐない。

第二日には、改善した道具を持つて出た。何からやる氣だと問はれて、はたきをかけますと云つたら言下に、それだから間違つてゐると、一撃のもとにはねつけられた。整頓が第一なのであつた。——その次には何をする。考へたが、どうもはたくより外に無い。——何をはたく。障子をはたく。障子はまだ——！ 私はうろ——する。——わからないか、ごみは上から落ちる、仰向け——。やつと天井の煤に氣がつく。長い采配の無い時には、しかたが無いから箒で

取るが、その時は絶対に天井板にさはるなと云ふ。煤の箒を縁側ではたいたら叱られた。——煤の箒で縁側の横腹をなぐる定跡は無

い、さういふしぐさをしてゐる自分の姿を描いて見なさい、みつともない恰好だ、女はどんな時でも見よい方がいゝんだ、はたらいてゐる時に未熟な形をするやうなやつは氣どつたつて澄ましたつて見る人が見りや問題にやならん、と右手に箒の首を掴み、左の掌にとんとんと當てゝ見せて、かうしろと云はれた。机の上にはたきをかけるのはおれは嫌ひだ、どこでもはたくはたきは汚いとしりぞけ、漸く障子に進む。

ばた／＼とはじめると、待つたとやられた。——はたきの房を短くしたのは何の爲だ、軽いのは何の爲だ、第一おまへの目はどこを見てゐる、埃はどこにある、はたきのどこが障子のどこへあたるのだ、そ

れにあの音は何だ、學校には音樂の時間があるだらう、いゝ聲で唱ふばかりが能ぢやない、いやな音を無くすことも大事なのだ、あんなにばた／＼やつて見る、意地の悪い姑さんなら敵討がはじまつたよつて駆け出すかも知れない、はたきをかけるのに廣告はいらない、物事は何でもいつの間にかのしごとができたかといふやうに際立たないのがいい。ことばは機嫌をとるやうな優しさ、毬いけのやうな痛さをまぜて、父の口を飛び出して来る。もと／＼感情の強い子なのである、このくらゐあふられ／＼ば恐れ、まどひを集めて感情は反抗に燃える。意地悪親爺めと思つてゐる。——ふむ、おこつたな、できもしない癖におこるやつを慢心外道といふ。外道にならない前にあつさり教へてくれると、不敵な不平が盛りあがる。私ははたきを握りしめて、一しよう懸命に踏んばつてゐる。いゝか、おれがやつて見せ

るから見てもなさい。房のさきは的確に障子の棧に觸れて、輕快なリズムカルな音を立てた。何十年も前にしたであらう習練は、さすがであつた。技法と道理の正しさは、まづ直に心に通じる大道であつた。かなはなかつた。感情の反撥はくすぶつてゐたが、從順ならざるを得ない。しかし、私の手に移るとはたきは障子の棧に觸れずに、紙にさはつた。房のさきを使ひたいと思ふと力が餘つて、びしりびしりといふ鋭敏過ぎる破壊的な音を立てる。わが手ながら勘の悪さにむしやくしやするところを、父は、お嬢さん痛いようとからかひ、紙が泣いてゐると云つた。私は障子に食ひさがつて何度もく戦つた。もういゝと云ふのでやめたら、それでよしちやいけないんだといふ。何でもおしりが肝腎なんださうで、出入りのはげしい部屋は建具の親骨が鬨を擦る處に、きつと埃ごみを引きずつてゐるか

ら、ちよいと浮かせ加減にしてそこを拂つとくもんだといふことである。襖にははたきを絶對にかけるなと教へられた。その頃うちは女中がゐつかず頻繁に入れかはつてゐたが、その女中達の誰でもが必ずといつていゝ位、毎朝目の敵にして唐紙をぶつばたく。そのくせ掃除のあとにはきまつて、隅の二枚の引手にはきのふの通りに埃がたまつてゐるのは實に妙なことだ。唐紙は毎日ほどほどな埃がたまるものではない、と云ふ。しかし埃はたまる、たまるからその時は羽根の塵拂ひをつかへ、羽根の無いときにはやつれ絹をつかへ、絹の無いときにはしら紙のはたきをつかへ、それも無いときにはむしろ埃のまんまで置いとけと云はれ、唐紙といふものはすぐく大事な物なんだなあと驚嘆し、非常に深く記憶にのこつてゐる。

箒も自分でして見せてくれた。持ちやう、使ひやう、疊の目縁、動作

の遅速、息つくひまも無い細かさであつた。箒は筆と心得て、穂先が利くやうに使ひ馴らさなくてはいけない、風に吹かれたやうな癖がついてゐる箒がぶらさがつてゐれば、その妻君はあまい、と判定を下した。變な氣がした。うちの箒はみんな風に吹かれてゐ、現にこの箒もきのふ洗つて形を直したのである。おとうさんうちのことを云つてゐるのか知らん。

掃き掃除は、とにかくにも濟んだのである。——十四にもなつてから何なんにも知らないで世話がやけるやうぢや、水の掃除などはとてものもことだ、當分拭き掃除はお預けにする、梯子段は一段々あがらなくちやならない、二段も三段も跨ぐことは無理だ、といふことであつた。休講のベルである。子供心に大した稽古であつたことを覺つてゐ、碎かれ謙遜になつた心は素直に頭を下げさした。箒

と平行にすわつて、ありがたうございましたと禮儀を取つた。よし、と返事が來た。起つて歩きかけると、——**あとみよそわか。**？とふりかへると、女はごみつぼいもんだから、もういゝと思つてからもう一度よく、呪文をとなへて見るんだと云つた。あとみよそわか、あとみよそわか、晴れ〜と引きあげて臺處へ來ると、葭すだれを透して流しもと深く日がさし込んでゐる。板の間に腰をかけてゐると、弟が庭からやつて來て簾越しに、ねえさんと聲をかけ、大上段にふりかぶつて、——小豆^{あづき}ながみつ、と斬りおろすしぐさをする。川中島の合戦、兜まで斬られたらうとからかふのである。軍配うちわだア、負けるもんかア、と私は躍り出して追つ駈ける。弟は畠へ陣を退いた。

毎日きちんと、日課として掃除に精を出した。机の上のかたづけ

かたも習つた。物を行儀に置くことも、行儀を外して置くこともできるやうになつた。自然、客のすわる處も茶碗の置き場も覺えた。はたきも箒も幾分進歩した。

それから十年、私は結婚して女の兒を恵まれてゐ、二人の女中がゐた。年弱の方をお初さんといつて幸田家の近くに住む職人の娘、純粹な町つ子であり、この人のねえさんには始終著物を縫つてもらつてゐたので、以前からの馴染であつた。色白の丸ぼちやの優しい子で、赤ん坊が好きなので自分から望んでお守り奉公に来てくれたのである。私はいとほしんでゐた。生後八ヶ月、赤ん坊は突如腸重疊といふ病氣に襲はれて、からくも開腹手術によつて危い生命をとりとめたが、どの先生から洩れたのか、誰から云ひ出したのかわからなかつたが、この病氣の原因としてどこでもよくする、高い／＼といふ